

東の山と西の山

中川 愛子

山が二つ、東と西に並んでありました。

東の山には桜の木がたくさん生えていました。けれども西の山には木どころか草一本も生えていませんでした。岩と石でできていた西の山はみんなから嫌われていたのです。

春になると東の山の桜は一斉に咲きました。

この時、東の山はピンクのドレスを着たお姫様のように輝きます。

西の山は東の山がうらやましくてなりません。ああ、私もきれいなドレスを着てみたい。

西の山は悲しくてポロっと涙をこぼしました。ちょうどその時、西の山の方に白い綿毛が飛んできました。綿毛が聞きました。

「西の山さん、どうして泣いているの？」

「見てごらんなさい。東の山はあんなにきれいなドレスを着ているのに、私はうす汚れた山肌のまんまです」

西の山はまた泣きました。

「泣かないで。私が黄色いドレスを着せてあげるわ」

「あなたは誰ですか？」

「私はふわり。たんぽぽの綿毛、種よ。決めた！ 私、ここに住むわ」

「私の山肌を見て下さい。石と岩ばかり。こんな所でたんぽぽさんは生きられますか？」

「心配ご無用よ。私はとても強い花。どんな逆境の中でも生きる力を持っているの」

「でも、小さな一つぶの種では、大きな私にドレスを着せることはできないでしょう」

「私にはたくさんの仲間がいるの。みんなで力をあわせれば、簡単な事よ。ほらっ、ごらんなさい。私の仲間がやってきたわ」

見るとたくさんの白い綿毛が、空いっぱい広がって、西の山の方へやってきます。

一番先頭の綿毛がふわりを見つけて言いました。

「ふわり、一人で先に行っちゃダメでしょ」

「ごめんなさい。早く住む所を見つけたくて」

「見つかったの？」

「ええ、そして皆にお願いがあるの。私に協力してほしいの」

ふわりは西の山に黄色いドレスを着せてあげる約束をした事を話しました。

すると仲間の綿毛たちは、

「すてき」

「東の山を驚かせてやりましょう」

「なんだかわくわくする」

と言いました。

綿毛たちはみんなふわりのお願いを聞いてくれたのです。それから西の山を包み込むように広がり、静かに岩と石のすき間に降りました。最後にふわりが西の山のとっぺんに降りて言いました。

「西の山さん、春になったら会いましょう」

「ふわり、綿毛の皆さんありがとう。春が来るのがこんなに待ちどおしいのは初めてです」

夏が過ぎ、秋が過ぎ、長い冬が終ると、西の山はまぶしいくらいきれいな黄色いドレスを着ることができました。

西の山は、うれしくてうれしくてポロッと涙をこぼしました。